

令和 2 年 9 月 24 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13538

研究課題名（和文）「筑豊文庫資料」を用いた日本炭鉱労働史の民衆史的検討

研究課題名（英文）Reserch on the coal mine labor history in Japan using "Chikuho Bunko Shiryo"

研究代表者

佐川 享平（SAGAWA, KYOHEI）

早稲田大学・大学史資料センター・助教

研究者番号：30756375

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、福岡県直方市が所蔵・管理する記録作家・上野英信旧蔵の「筑豊文庫資料」の調査・整理作業を基幹に据えたものである。直方市との協力関係のもとに進められた整理作業を通じて、5000件以上の資料で構成される「筑豊文庫資料」の全体像が明らかになった。また、「筑豊文庫資料」に含まれる特徴的な資料（個別炭鉱企業の資料や、炭鉱関係者からの聞き取り記録など）の把握と分析によって、民衆史的視座から日本炭鉱労働史研究を推進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中小炭鉱の労働者の姿を描き続けた上野英信の「筑豊文庫資料」を活用することで、これまで経営史の分野で研究蓄積の進んでいた炭鉱（労働）史を、民衆史的視座から捉え直すことを企図したものであり、炭鉱の歴史像の豊富化に寄与した。また、本研究を通じて、全くの未整理状態であった5000件超の資料が整理されたことによって、本資料を用いて研究を推進するための基盤が整備され、今後の研究の進展に寄与することになった。

研究成果の概要（英文）：This research is based on the research and classification of the "Chikuho Bunko Materials", which is a former collection of Eishin Ueno, owned and managed by Nogata City, Fukuoka Prefecture. Through the classification work that was carried out in cooperation with Nogata City, the whole picture of the "Chikuho Bunko Materials", which consisted of more than 5000 materials, became clear. In addition, I analyzed the characteristic materials contained in the "Chikuho Bunko Materials" (materials of coal mining companies, interview records from people involved in coal mining, etc.) and promoted research on the history of Japanese coal mining labor.

研究分野：日本史

キーワード：日本近現代史 炭鉱労働 上野英信 筑豊文庫

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

山本作兵衛が描いた鉱夫の絵などがユネスコ記憶遺産に登録(2011年)されたことを一つの契機として、炭鉱のイメージや記憶にまつわる研究が盛んになっている。また、炭鉱や炭鉱労働者の過去像をめぐって、様々な言及がなされるようになった。しかし、歴史学の分野では、炭鉱労働者を主語とする民衆史的研究(あるいは社会史的研究)の成果に乏しい。その主たる要因は、炭鉱労働者自身が資料を残すことはほとんどなく、歴史研究に利用し得る資料が極めて限られるという点に求められよう。一方で、炭鉱は、上野英信や森崎和江など、ルポルタージュ(記録文学)という形で炭鉱労働者の心性に迫る、優れた記録者と作品を生み出してきた“場”でもある。歴史学における炭鉱を舞台とした民衆史的研究の蓄積の乏しさは、ルポルタージュ作品の豊かな成果が、歴史学と有機的に結びついていないことの反映であるとも考えられる。

申請者は、これまでの研究過程において、上野英信が、筑豊地域で鉱夫として働いた人物を対象に行った聞き書き記録を活用した経験があり、以来、上野英信が蒐集した資料の歴史的価値に着目してきた。本研究は、直方市に寄贈された上野英信旧蔵「筑豊文庫資料」に接し、同資料に残された膨大な資料を活用することによって、資料の欠乏という課題を克服しつつ、新しい知見を得られるとの見通しを得て、開始されたものである。

### 2. 研究の目的

本研究における学術的な特色は、未整理のまま保管されている膨大な「筑豊文庫資料」の調査・整理を通じて、その全体像を明らかにするとともに、同資料の分析によって、炭鉱史研究と、戦後民衆史研究における新地平の開拓を目指すところにあった。

本研究計画が着目する「筑豊文庫資料」とは、戦後、福岡県筑豊地域を舞台に活躍したルポルタージュ(記録文学)作家・上野英信(1923~1987年)の残した、容量50リットルのコンテナ約120個分に及ぶ資料群である。この資料群は、上野が鞍手郡新延六反田の鉱夫長屋を修繕して設置した「筑豊文庫」に収められていたもので、2016年、直方市が一括して受け入れる運びとなった。本研究計画は、「筑豊文庫資料」の特性を踏まえ、その分析に以下、2つの学術的意義を見出した。

第1に、炭鉱史研究における資料的欠乏の補完と、民衆史的・社会史的視座に基づく研究の深化・推進である(課題(2)に対応)。「筑豊文庫資料」には、炭鉱に関わる様々な性格の資料が含まれることが見込まれた。特に、上野が一貫して中小・零細炭鉱の炭鉱労働者(鉱夫)に着目し、歴史的な視角を重視していたことを反映して、鉱夫に関する資料が残されていることが予想された。この「筑豊文庫資料」の検討を通じて、炭鉱労働者を主語とした民衆史的・社会史的視座から、炭鉱(労働)史研究を進展させることができると期待されたのである。

第2に、資料論的なアプローチを用いた上野英信の再評価・再検討である(課題(3)に対応)。上野の作品は、自ら鉱夫長屋に居を構え、時に鉱夫として働いた経験や、綿密で地道な取材によって裏付けられた点に大きな特徴がある。反面、ルポルタージュという手法故に、彼が具体的にどのような資料に依拠して叙述を行ったのかは、必ずしも明確ではない。しかし、「筑豊文庫資料」に残された資料を読み解きつつ、上野の作品と対照させるという資料論的なアプローチによって、その分析が可能になるものと見込まれた。

上記の2点に加えて、「筑豊文庫資料」が整理されることによって、今後、この資料から様々な論点を引き出すことが可能になるものと期待され、「筑豊文庫資料」を整理すること自体に、重要な学術的意義があると考えた。

### 3. 研究の方法

本研究は、以上の認識と見通しに立ち、「筑豊文庫資料」の調査・整理・分析を通じて、戦前から戦後に至る時期の炭鉱(労働)史を、民衆史的・社会史的視座から把握すべく構想された。本研究の目的に即し、具体的に以下3つの課題を設定し、3ヶ年度での取り組みと達成を期した。

- ・課題(1): 直方市の管理する「筑豊文庫資料」の調査・整理作業を行うこと。
- ・課題(2): 戦前・戦後の炭鉱労働史を、民衆史的・社会史的視座から再構成すること。
- ・課題(3): 資料論的なアプローチに基づく上野英信の再評価を行うこと。

それぞれの課題は密接に関連しており、課題(1)は、本研究計画の基盤をなす資料調査についての課題である。この課題(1)で得られた成果を活かしつつ進められるのが、課題(2)・課題(3)である。課題(2)においては、上野が蒐集した多様な炭鉱関係資料を活用し、課題(3)では、上野の残した原稿・草稿類を用いた分析を行うこととした。

本研究は、上記3つの課題を、**基幹的研究**と**発展的研究**とに大別する方法を採用し、3ヶ年の計画を立て、その遂行に努めるものとした。基幹的研究は課題(1)・(2)に、発展的研究は課題(3)にそれぞれ該当する。このうち、基幹的研究については、課題(1)に29~31年度を通じて取り組み、課題(2)には30年度より着手するものとした。発展的研究に位置付ける課題(3)については、31年度を目途に着手するものとした。

### 4. 研究成果

基幹的研究のうち、特に本研究の基盤をなす課題(1) = 「筑豊文庫資料」の整理作業については、初年度(29年度)より最終年度(31年度)まで、3ヶ年度にわたって取り組むこととなった。直方市との協力関係のもとに行われたこの整理作業を通じ、目録に採録した資料件数は

5300 件を超える。目録については、一層の精査を要するものであり、また、作業の過程で未整理資料の新規発見もあったため(後述)、依然として未完成ではあるが、本作業を通じて、「筑豊文庫資料」の全体像をおおよそ明らかにすることができた。なお、本資料の整理作業については、本研究計画の実施期間終了後も、継続的に実施される予定である。

その一方、本課題を進める過程では、いくつか当初の見込みとは異なる事態が発生し、計画の変更・軌道修正が必要となった。1つ目の変更点は、新たに未整理資料が発見されたことに伴うものである。課題(2)・(3)の一環として実施している関係者からの聞き取り調査を進めた結果、最終年度(31年度)半ばの段階に至って、現在、直方市が管理している分以外に、「筑豊文庫資料」の一部を構成する未整理資料が、まとまって存在していることが確認された。その分量は段ボールにして約20箱分に及び、資料全体の性格にも影響を及ぼす分量であるため、この新規発見分の調査・内容確認作業を、課題(2)・課題(3)に優先して実施することとした。もっとも、新たに発見されたこの未整理資料については、時間的な制約などから、既整理分と同等レベルでの整理作業を実施することはできず、大まかな内容把握にとどまった。変更の2点目は、想定していた資料の内容・性格と現物との齟齬に伴うものである。計画段階では、「筑豊文庫資料」には上野英信自らが作成した資料(手記や草稿など)が含まれていると見込んでいたが、実際に整理作業を進めた結果、上野自身が作成した資料は極めて少ないことが明らかになった。そのため、草稿類を用いて実施する予定であった課題(3)については、当初の想定よりも限定的な内容となった。

次に、課題(2)については、課題(1)を踏まえて、「筑豊文庫資料」に含まれる特徴的な資料の把握と、内容の分析を進めた。主たる検討対象は以下の資料である。個別炭鉱企業に関する資料。日鉄鉱業・三菱鉱業といった大手企業だけでなく、室井鉱業のような地元企業の資料が、それぞれ数百単位で存在し、「筑豊文庫資料」全体の半数あまりを占めていることが明らかになった。そのほとんどは戦後期のものであり、経営資料だけでなく、労働組合が作成した資料も多数含まれていた。当然粗密はあるものの、炭鉱企業を比較しつつ、労使双方の視点から戦後の炭鉱の内実に向き合う資料となっており、その分析を進めた。炭鉱関係者を対象とした聞き取り記録のテープ。聞き取りは上野英信が行ったものではなく、上野と交流のあったマスコミ関係者が取材のために行い、後に上野に提供されたとみられ、その分量はオープンリール215リール分である。聞き取り対象は、炭鉱で働いた人々、労働・社会運動家、炭鉱経営者、地域住民など様々で、年代(対象者の年齢)も多岐にわたっていることが明らかとなり、その読解を進めた。上野英信が収受した資料。宛名を上野英信と明記した資料こそ少数であるが、上野に寄贈された、または上野が購入したとみられる資料が相応に含まれていることが判明した。特に、文芸サークルの機関誌類は、上野の交友関係や影響力を考察する点からも貴重であり、各作成者(サークル)の履歴や上野との関係について調査を行った。これらの調査・分析の成果について、研究計画の実施期間内に、学術論文や学会発表という形では公にすることはできなかったが、課題(1)で作成した目録の解題として、その概要をまとめている。

発展的研究に位置づけた課題(3)については、先述の通り、当初の目論見と資料の内容に相違があったこと、また、基幹的研究の推進を優先したために、十分な成果を挙げできなかった。しかしながら、本課題の一環として、上野英信の関係者に対するインタビューを含め、継続的に周辺情報の調査を実施したことが、31年度の未整理資料の新規発見につながったことを付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----